

# 第2回 国士舘救急救命士会フォーラム ～国士舘大学が輩出する救急救命士の将来像～

共催：国士舘大学体育・スポーツ科学学会 国士舘大学体育学部スポーツ医科学科  
協力：国士舘大学大学院救急システム研究科



## プログラム・抄録集

会期：2023年10月7日（土）

会場：国士舘大学 多摩キャンパス 25号館 臨床実習室







# スポ医 Instagram はじめました！



FOLLOWしてね！

# 国士舘大学体育・スポーツ科学学会

## 第2回 国士舘救急救命士会フォーラム

### ご挨拶

国士舘大学体育・スポーツ科学学会 会長  
国士舘大学体育学部 学部長  
国士舘大学体育学部 スポーツ医科学科 教授



山口 嘉和

第2回国士舘救急救命士会フォーラムを開催するにあたり、皆さまにご挨拶を申し上げます。

本学スポーツ医科学科は2000年に、当時学部長でありました大澤英雄理事長と初代学科主任の故天羽敬祐先生のご尽力のもと創設され、今年で創立24年を迎え、2,950名の卒業生を全国に輩出してきました。またスポーツ医科学科開設時より在籍していた先生方も昨年4名が定年退職され、さらに今年から5年間で7名の先生方が退職されます。現在、卒業生4名を含め若い先生方がエネルギーに学科発展のため研究、教育に活躍されております。

第2回フォーラムは、午前と午後の2部構成であり昼休みを長くっておりますので卒業生、在学生の交流の時間となればと思います。午前の部のはじめは、卒業生で専任教員として活躍されている喜熨斗智也先生、坂梨秀地先生の司会のもと「在学生の今」というテーマで在学生5名にスポーツ医科学科の現状を話してもらいます。

次に、この4月からスポーツ医科学科の特任教授に就任されました防衛医科大名誉教授の齋藤大蔵先生による特別講演があります。齋藤先生は昨年度まで大学病院の救命救急センター長として活躍されており貴重なお話が聞ける事と思います。齋藤先生の詳細なご紹介は大学院研究科長の田中秀治先生にお願いしたいと思います。午後の部では、第1回フォーラムのテーマと同様に卒業生の高橋宏幸先生と津波古憲先生の司会のもと各分野で活躍されている5名の卒業生により「卒業生の今」というテーマで講演して頂きます。

次に現在、学科主任としてスポーツ医科学科の改革を推し進めている牧亮先生司会のもと、3月末で定年退職する私と竹内栄一先生の最終講話があります。最後に、このフォーラムが在校生と卒業生の情報共有の場となり今後のスポーツ医科学科の発展につながることを祈念いたします。

# プログラム

## ■ 開会 10:00

山口 嘉和(国士舘大学体育・スポーツ科学学会 会長)

## ■ スポ医在校の今 10:05～11:20

司会:喜熨斗 智也(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授)

坂梨 秀地(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 助教)

1.「救急救命士になった先に目指す将来像～スチューデントアシスタントを経験して～」

針谷 拓(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 4年生)

2.「学生救護勉強会について～スポーツ医科学科の救護力向上を目指して～」

高橋 亜樹良(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 3年生)

3.「一般市民と医療従事者の間に立つライフセーバーの今後」

長瀬 柊(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 3年生)

4.「文武両道を心掛けた学生生活」

藤森 瑞生(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 4年生)

5.「“救急救命士になる覚悟”をもった5ヶ月 ～消防で輝く救急救命士になるために～」

相崎 由凧(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 1年生)

## ■ 特別講演 11:20～12:00

司会:田中 秀治(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授)

齋藤 大蔵(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 特任教授、防衛医科大学校 名誉教授)

「本邦における救急救護の発展と社会的意義 -誇りと情熱をもって生きるために-」

## ■ お昼休憩 12:00～13:15

# プログラム

## ■ スポ医卒業生の今 13:15～14:45

司会:高橋 宏幸(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授)  
津波古 憲(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 講師)

1.「消防救助機動部隊(ハイパーレスキュー隊)の救急救命士～その任務と今までの経験について～」  
石綿 大士(東京消防庁・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 2期卒)

2.「女性消防士の今後の活躍に向けて」  
小林 菜々(川崎市消防局・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 12期卒)

3.「病院救急救命士の役割～医科大学での特性を活かして～」  
作山 洋貴(埼玉医科大学医学教育センター・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 13期卒)

4.「医療行為を行わない救急救命士の働き方～神奈川県庁職員として～」  
佐藤 奈帆(神奈川県庁・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 10期卒)

5.「命の教育の実践を通して～救急救命士の資格を持つ保健体育科教諭の可能性～」  
野瀬 珠榮(昭和第一学園高等学校・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 3期卒)

## ■ 休憩 14:45～15:00

## ■ 退職教員記念講話 15:00～15:50

司会:牧 亮(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 学科主任)

山口 嘉和(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授)  
竹内 栄一(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授)

## ■ 閉会

牧 亮(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 学科主任)

# スポ医在校生の今

司会:喜熨斗 智也 (国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授)

坂梨 秀地 (国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 助教)

1.「救急救命士になった先に目指す将来像～学生アシスタントを経験して～」

針谷 拓 (国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 4年生)

2.「学生救護勉強会について～スポーツ医科学科の救護力向上を目指して～」

高橋 亜樹良 (国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 3年生)

3.「一般市民と医療従事者の間に立つライフセーバーの今後」

長瀬 柊 (国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 3年生)

4.「文武両道を心掛けた学生生活」

藤森 瑞生 (国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 4年生)

5.「“救急救命士になる覚悟”をもった5ヶ月 ～消防で輝く救急救命士になるために～」

相崎 由凧 (国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 1年生)

# スポ医在校生の今

## 1.「救急救命士になった先に目指す将来像

### ～スチューデントアシスタントを経験して～

針谷 拓（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 4年）

私は今、3年生の救急救命処置実習3の授業でSA（スチューデントアシスタント）として授業を補助している。昨年、私自身も同じ授業を履修した。その際に当時の4年生の先輩方がとてもわかりやすく教えていただいたのが非常に印象に残っている。

救急救命処置実習3は主に特定行為と呼ばれている救急救命処置を学ぶ授業で、高度な技術を学ぶ。私自身も去年とても苦労した科目であり、昨年一年間で培った物を後輩に共有することで少しでもその学びの一助になればと思い、SAに志願した。

実際にSAとして授業に参加すると、履修生だった頃には気づかなかったことが見えてきた。教授や実習助手の先生の教えかたは一人ひとり違っており、現場の経験を元にしてそこから得た経験が学生に還元されていて、より実践的な教育が行われていた。そしてSAとして履修生に教えると、一人ひとりに合わせて教えかたを変えることが求められるため、いかにわかりやすく教えるかにとっても苦労した。

私の将来の夢は大学で救急救命士教育をすることであり、私が目指すのはスペシャリストとしての救急救命士を養成できる救急救命士である。今はそのためにSAやBLSなどの教育現場に携わり多くの先生方の教育技法を見ながら、自らの教育理念を構築するために尽力している。

## 2.「学生救護勉強会について

### ～スポーツ医科学科の救護力向上を目指して～

高橋 亜樹良（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 3年）

学生救護勉強会とは、学生による学生のためのスポーツイベント等の救護活動に関する勉強会として月に1～2回ほど開催している。救護経験のある3,4年生が救護活動について後輩に講義・実習を行い、救護力向上を目指すことを目的としている。

前任の勉強会統括が実施したアンケートによると学生が最も苦手と感じるのは傷病者に対する接遇であった。またバイタルサインの測定のスムーズさは練習回数に比例する。今年度は、新たに2つの制度を導入し、救護力の更なる向上を目指している。

1つ目は、各勉強会の連続性である。バイタルサインの測定や救護記録等を分けて学ぶのではなく、想定訓練を勉強会の終わりに実施し、前回までの内容と合わせて実習をする。実際の救護活動の流れを理解させ、反復練習からスキルの定着に繋げるためである。

2つ目は、勉強会のレベル設定についてである。下級生のみが向上する体制では、例年と同じ内容になり救護力の向上に繋がらない。上級生向けの目標も設定しスポーツ医科学科全体の救護力向上ができるようにした。今年度は、脳震盪認識ツールの解説回を実施した。今後は、特殊競技救護要領や本部要領などを検討している。

学生の内から臨床に触れることは貴重な経験となる。実際の救護現場で少しでも冷静に活動できるように事前準備として勉強会が重要であると考えます。



## 3.「一般市民と医療従事者の間に立つライフセーバーの今後」

長瀬 柊（国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 3年）

ライフセービングという活動をご存知でしょうか。

ライフセービングの根本にあるのは事故を未然に防ぐことですが、いざと言う時のために日々レスキューの練習に励み、応急処置や緊急時の対応方法を模索している。私は、2021年に国土舘大学に入学後、国土舘大学ライフセービングクラブに所属し、現在は下田ライフセービングクラブ白浜地区でパトロールを行っている。「1人でも多くの命を助け、リアルな知識を得たい」という一心でライフセービングを始め、現在もその気持ちを忘れずに活動を続けている。

タイトルの通り、ライフセービングは一般市民と医療従事者の間で活動することが多い。その中で在学中に多くの先生方や日本ライフセービング協会(JLA)の方々とともに考えているのは、「どのような救命の知識がライフセービングの現場で役に立ち、救命率を向上させるか」ということである。このような知識を自身の開催する勉強会などでライフセーバーなどへ普及していきたいと考えている。

将来、消防機関で働く際には、即戦力として活躍する力を持ちながら、応急処置などを自身の経験を通じて普及していけるよう、学生時代に多くの経験をしていきたい。

## 4.「文武両道を心掛けた学生生活」

藤森 瑞生（国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 4年）

私が所属していた国土舘大学準硬式野球部は1969年の創部以来、インテリジェンスを有する指導者の育成を目標として活動しており全国各地から技術、意識共にレベルの高い選手が集まり、全日本大会優勝を目指して部活を行っている。私は大学で救急救命士の勉強をしながら野球がしたかったため、この両方を実現させるには国土舘大学が最適だと思い入学を決意した。最高学年になった時には野球部の主務を務めることになった。主務は裏で部活動の円滑な運営のために様々な作業を行うため、他の部員に比べ業務が多く、自分の時間が削られ、勉強が疎かになりそうになった。そこで私が心がけたことは、時間の使い方を見直すことである。今までの自分の生活を見直し、無駄な時間を削り、物事の優先順位を決め、やるべき事をこなしていった。他の人よりもゆっくりする時間は少なかったが、主務としての責任感を持って引退まで成し遂げることができた。公務員試験も重なり大変な時期もあったが、部活動と学業の両立で身につけた時間管理能力を活かし、東京消防庁の内定を頂けた。大学で培ったものを活かし、責任感のある立派な消防士になることが将来の目標である。

## 5.「“救急救命士になる覚悟”をもった5ヶ月 ～消防で輝く救急救命士になるために～」

相崎 由凧（国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 1年）

高校1年生の時、祖父が倒れた際、地元の救急隊が誠実かつ迅速に活動する姿に惹かれ、人のために尽くせる人材として救急救命士となることを決めた。国士舘大学の「国を思い、世のため人のために尽くせる人材、国土の養成」という建学の精神に惹かれ、国士舘大学での4年間で自らの知識と技術を高め、消防組織で活躍できる“国土”になりたいと感じ、国士舘大学体育学部スポーツ医科学科を選んだ。

水難救助実習を通じて、“救急救命士になる覚悟”について深く学んだ。これにより、救急救命士を目指した当初の気持ちを改めて振り返ることができたとともに、理想の救急救命士になるため、日々の努力の必要性を痛感した。さらに、先生方や先輩方の支援のもと、厳しい環境の中でも安全に学べることがどれほど恵まれているかを実感し、改めて国士舘大学体育学部スポーツ医科学科に入学してよかったと感じている。

スポーツ医科学科での4年間を通じて、学外での救護活動やBLSの普及、学会発表などを経験し、自身の知識と技術の向上を図り、少しでも救急救命に興味を持つ人が増えるような取り組みを行いたい。今後、先輩方が作り上げてきたスポーツ医科学科の伝統を引き継いでいけるように、日々精進していきたい。

# 特別講演

司会: 田中 秀治(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授)

齋藤 大蔵(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 特任教授、防衛医科大学校 名誉教授)  
「本邦における救急救護の発展と社会的意義 -誇りと情熱をもって生きるために-

# 特別講演

齋藤 大蔵

国土舘大学体育学部スポーツ医科学科 特任教授

防衛医科大学校 名誉教授



## 「本邦における救急救護の発展と社会的意義

### —誇りと情熱をもって生きるために—

日本の救急救命士制度は 1991 年に救急救命士法が制定されて以来独自に発展し、救急救命士は救急医療の初期対応を担う重要な存在となった。国土舘大学体育学部スポーツ医科学科は 2000 年 4 月に 4 年制大学として初めて救急救命士の国家試験受験資格を取得し、卒業生は既に約 3000 名で、年間の国家資格合格者数は日本一を独走している。また、2010 年に発足した大学院救急システム研究科は本邦の病院前救急医療の分野を牽引するリーダー養成のための学びの場で、国土舘大学の教育理念を実践している。ただ、救急救命士として誇りと情熱をもって社会的意義のある職務を邁進する土壌があっても、現実的な壁はまだ高いのではないかとも思料する。演者は国土舘大学と比較すると圧倒的に小さい規模ではあるが、国民に貢献する自衛隊医官を養成する「防衛医科大学校」に入校して 46 年間、教官として 26 年を過ごしてきた。演者の“山あり谷あり”の人生を本講演で赤裸々に語ることによって、誇りと情熱をもって生きるための術を見出していただければ光栄である。国土舘大学体育学部スポーツ医科学科の卒後生は、胸を張って日本社会に貢献できる存在である。

#### ～略歴～

- ・1983 年防衛医科大学校卒業
- ・1996 年から防衛医科大学校病院救急部助手
- ・2006 年から防衛医科大学校防衛医学研究センター外傷研究部門教授
- ・2010 年から防衛医科大学校病院救急部兼務
- ・2021 年から防衛医科大学校 病院救急部長・救命救急センター長・図書館長
- ・2023 年 3 月防衛医科大学校定年退官
- ・2023 年 4 月から国土舘大学特任教授

#### ～担当科目～

- ・メディカルコントロール特論
- ・救急倫理・統計・プレゼンテーション演習 I・II
- ・防災救命教育
- ・救急・蘇生統計学特別研究

# スポ卒業生の今

司会: 高橋 宏幸(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授)

津波古 憲(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 講師)

1.「消防救助機動部隊(ハイパーレスキュー隊)の救急救命士～その任務と今までの経験について～」

石綿 大士(東京消防庁・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 2期卒)

2.「女性消防士の今後の活躍に向けて」

小林 菜々(川崎市消防局・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 12期卒)

3.「病院救急救命士の役割～医科大学での特性を活かして～」

作山 洋貴(埼玉医科大学医学教育センター・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 13期卒)

4.「医療行為を行わない救急救命士の働き方～神奈川県庁職員として～」

佐藤 奈帆(神奈川県庁・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 10期卒)

5.「命の教育の実践を通して～救急救命士の資格を持つ保健体育科教諭の可能性～」

野瀬 珠榮(昭和第一学園高等学校・国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 3期卒)

# スポ医卒業生の今

## 「消防救助機動部隊(ハイパーレスキュー隊)の救急救命士

～その任務と今までの経験について～」

石綿 大士:東京消防庁 航空隊(スポ医 2 期生)

現在、東京消防庁では消防救助機動部隊(通称:ハイパーレスキュー隊)5 隊が特殊な装備や車両で、航空消防救助機動部隊(通称:エアーハイパーレスキュー隊)1 隊がヘリコプターで、都内で発生した火災や救助活動、都外で発生した大規模災害等に出場し災害対応している。ハイパーレスキュー隊には、国際緊急消防援助隊(International Rescue Team:IRT)に登録されている隊員も在籍し、海外からの派遣要請の際には被災国に行き活動する。ハイパーレスキュー隊はレスキューの資格、機関員(緊急車両の運転手)の資格、救急救命士の資格、その他特殊な資格を持つ隊員で構成され、救急救命士は都外への災害派遣時は健康管理や受傷時の救護活動といった任務もある。私は平成 17 年 3 月に国士舘大学を卒業した。平成 18 年 4 月に東京消防庁に入庁し、17 年が経つ。これまでの職務で経験したことや、感じたこと、学んだことを皆さんにお伝えし、今後様々な進路に進んでいく皆さんの参考になれば幸いである。

## 「女性消防士の今後の活躍に向けて」

小林 菜々:川崎市消防局(スポ医 12 期生)

現在、私が所属する川崎市消防局は、職員約1400名で構成され、川崎市内に8消防署28出張所を設置し、様々な災害に対応している。また、消防車や救助工作車、救急車、はしご車などの車両だけでなく、大型消防艇や消防ヘリコプターも配備しており、市街の災害にも対応している。また、川崎市消防局は、昭和44年に全国で初めて女性職員を採用した消防本部でもあり、現在も、女性が働きやすい職場を実現させるために、職場環境の改善に向けた研修の実施や、日勤救急隊の運用、出産育児などの理由で長期間現場から離れている救急救命士等の復帰を目的とした、リスタートプログラムを実施している。

しかし、出産後も現場で活躍する女性の救急救命士は少なく、救急現場において女性の救急救命士が必要とされる一方で、施設の問題や勤務時間の問題など、改善すべき点は多く存在すると感じている。

私自身は、スポーツ医科学科を 12 期で卒業し、民間救急(日本救急システム株式会社)での勤務を経て、2019 年に川崎市消防局に入局した。入局後は、消防隊を 1 年経験したのち、現在まで救急隊として勤務している。

今回、女性の救急隊員として働く中で感じたことをお話し、これから社会に進出する学生の皆さんの一助になれば幸いである。

# スポ医卒業生の今

## 「病院救急救命士の役割

### ～医科大学での特性を活かして～」

作山 洋貴: 埼玉医科大学医学教育センター(スポ医 13 期生)

2016 年にスポーツ医科学科を卒業し救急救命士免許を取得、埼玉医科大学国際医療センターの救命救急科に入職した。主な仕事は、ドクターカー業務、転院搬送、医師含めた教職員への蘇生教育(二次救命処置含む)、救命救急センターのデータベース管理、消防機関での検証会における検証医の補助、他機関の救急救命士および救急隊、学生の実習対応である。そして、2023 年 4 月より埼玉医科大学医学部医学教育センターに教員として配置転換となり、シミュレーショントレーニングセンターで勤務している。埼玉医科大学には救急車を受け入れている病院が 3 つあるが、その全てに救急救命士が在籍し、常勤の救急救命士だけで 13 名在籍している。大学病院の救命救急センターや医学部において救急救命士がどのような役割を担っているのか、どのような業務を実施しているのか知っていただき、今後の参考になったら幸いである。

【当法人に在籍しているスポーツ医科学科卒業生】

齊藤(旧姓:遠山)笑里:15 期、吉田奈央:18 期、片山久瑠:20 期、佐々木光風:20 期

## 「医療行為を行わない救急救命士の働き方

### ～神奈川県庁職員として～」

佐藤 奈帆: 神奈川県庁(スポ医 10 期生)

神奈川県では、平成 27 年から救急救命士の有資格者を対象とした採用を行っており、県庁職員として現在 24 名が在籍している。採用後は、事務職として各所属に配属されることになるが、災害対策や医療など、救急救命士の知識を活かすことのできる部署への配属が主となっている。

私は、私立中高の養護教諭を経て、平成 31 年に神奈川県に入庁し、保健福祉事務所に配属された。担当業務は、地域の災害医療や医療法等に基づく許認可などであるが、コロナ禍においては、ダイヤモンドプリンセス号対応における神奈川県対策本部事務のほか、新型コロナウイルス感染症緊急包括支援交付金の審査事務、かながわ緊急酸素投与センター設置事務に従事した。

医療行為を行わない救急救命士の働き口は僅かではあるが、新たな分野の担い手として、その立場を確立していければと考えている。

# スポ医卒業生の今

## 「命の教育の実践を通して

### ～救急救命士の資格を持つ保健体育科教諭の可能性～」

野瀬 珠榮（3期生） 昭和第一学園高等学校

私は大学在学中に自分の進路を決めていく中で、「命の教育によって命を救うことに貢献したい」という強い思いとともに、救急救命士の資格を持つ保健体育科教諭だからこそ出来ることがあるのではないかと考え、高等学校の保健体育科教諭になることを決めた。

2006年に国士舘大学を卒業し、23区内の私立学校で2年間非常勤講師として勤めた後、現在の職場である私立昭和第一学園高等学校に着任し、約15年が経った。教員として、クラス担任を担いながら日々体育や保健の授業を実践し、その中で様々な形で命の教育にも取り組んできた。また、部活動ではライフセービング部の顧問として、ライフセービング活動を通じた命の教育にも取り組んでいます。そして、命の教育の実践がこれからを担う高校生の成長の一助にもなると考えています。また、救急救命士の資格を持つ保健体育科教諭として養護教諭の先生とともに学校の安全管理のために貢献することも求められている。

そのような中で、自分にできることは何か切磋琢磨しながら、救急救命士の資格を持つ保健体育科教諭として更なる可能性を広げることにチャレンジしていきたいと考えている。



# 退職教員記念講話

司会: 牧 亮(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 学科主任)

山口 嘉和(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授)

竹内 栄一(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授)

# 退職教員記念講話

山口 嘉和 先生(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授)

## ～略歴～

- 1979年 杏林大学 医学部 医学科
- 2001年 国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 教授
- 2012年 国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 学科主任
- 2022年 国士舘大学体育学部 学部長



## ～担当科目～

- 内科学3(総論:消化器・内分泌)
- 内科学4(各論:消化器・内分泌)
- 臨床解剖学
- 疾病救急医学各論2(消化器・内分泌・代謝)
- 疾病救急医学各論3(腎泌尿系・血管血液系・感染症・皮膚)
- 卒業研究1
- 卒業研究2
- 高齢者生活習慣病特論
- 救急症候・疾病学特別研究
- 救急倫理・統計・プレゼンテーション演習
- 救急倫理・統計・プレゼンテーション演習Ⅰ
- 救急倫理・統計・プレゼンテーション演習Ⅱ

# 退職教員記念講話

竹内 栄一 先生(国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授)

～略歴～

1981年 神奈川工科大学 工学系研究科 卒業  
東京消防庁 入庁  
2019年 東京消防庁 金町消防署 署長  
2019年 国士舘大学体育学部スポーツ医科学科 准教授



～担当科目～

患者搬送技術論  
救急医療行政(関係法令を含む)スポーツ栄養学  
救急処置実習C-1(救急車同乗実習)  
救急処置実習C-2(救急車同乗実習)  
現場救急活動概論(搬送技術含む)  
救急救命処置実習2  
キャリアアップ実践講座  
コミュニケーション演習 I  
コミュニケーション演習 II  
救急車同乗実習  
卒業研究 1  
卒業研究 2  
救急倫理・統計・プレゼンテーション演習  
救急倫理・統計・プレゼンテーション演習 I  
救急倫理・統計・プレゼンテーション演習 II

# 特別付録

# 体育・スポーツ科学研究

2007年 第7号



国士舘大学 体育・スポーツ科学学会



## スポーツ医科学科の誕生 - その生まれ出る苦しみ -

天羽 敬祐

Keisuke AMAHA

## プロローグ

「国士館大に新しい4年制の学科ができるようなんですが、先生行って手伝ってやりませんか」

当時、東京医科歯科大の医学部教授だった僕のところへ、医学部長の佐藤達夫君がこんな話が持ち込んできたのは、平成8年の3月頃だった。

僕が定年を迎える二年前である。定年後をどうするかは、漠然と考えてはいたがまだはっきりした計画はなかった。

国士館大については全く無知だった。それまで横浜市大、東北大、医科歯科大と医学部畑を歩んできた僕には、国士館といえば右翼とか体育系とかいう言葉が思い浮かぶ程度の知識しかなかった。知識が無いから持ち込まれた話の内容の良し悪しは判断できなかった。

しかし国士館大に救急救命士のための学科が本当にできるのか、甚だ疑問に思ったのは確かである。「考えておきます」と一応佐藤医学部長には言ったが、正直の所、行く気はあまりなかった。

数日後、当時の文部省の事務官から電話が入った。

「先生、適任ですよ。行ってやって下さいよ」

その頃、僕は文部省の大学等設置審議会など幾つかの委員をしていて、この事務官は顔見知りで、大そう仕事熱心な男だった。

昔の国士館とは違います、と事務官は何度も強調

していた。

平成8年5月31日午前、国士館大の松島理事長、大門代表理事以下数名の理事が東京医歯大を訪れ正式に学科開設の援助を依頼してきた。

新学科の構想は以下のようだった。

国士館の体育学部内に高度の知識を持つ救急救命士を育成する4年制の新学科を作る、建物は新築し、必要な設備などは出来る限り当方の要望に沿って整える、開設は平成10年春、等々である。

僕の定年は平成10年3月末だから時期的にもちょうど良い。

もちろん本邦初の試みである。やり甲斐がありそうだと思った。

僕は承諾した。

退官後も同じ医療畑で働くより、苦労は多いだろうが少し違った領域で働いてみるのも新鮮な経験ができて面白いかも知れない、と考えたからである。

## 挫折

平成9年。穏やかな正月だった。1月の17日、新学科に就任予定の教職員が集まって、表参道の南国酒家で新年会を開いた。新しい学科への希望と期待に、皆、話が弾んだ。

一年半後の学科新設を目指して僕はゆっくり活動

を開始した。一年以上もある、と思っていた。教職員の人选、カリキュラムの作成、実習器具の選定、建物の基本的な構想などなど、やることはいくらでもあったが、まあ、のんびりやろうと気楽に構えていた。

だが世の中そんなに甘くない。数週間後、深刻な問題が起きた。

国士館には、政経、文、工、体など五つの学部があったが、新学科は体育学部内に設置することになっていた。ところが、体育を除くすべての学部が新学科設置に反対を表明したのである。

学科新設は理事会の決議である。理事会は必死に各学科を説得した。

が、一度燃え上がった反対の火の手はなかなか消せない。理事会は力尽きてとうとう2月12日の会議で開設を一年先送りにすることを決めた。国士館の開設準備室にいた野田牧生氏がその日のうちに僕にこの話を伝えてきた。

僕は激怒した。

「腰抜け理事会め！自分で決めたことを自分で反古にするとは何たるザマだ」

国士館にどんな内部事情があるかは知らない。しかし少なくとも理事会は、大学の進路を決める最高の決議機関ではないか。その決議が、一年も経たないうちにまた同じ理事会で変えられてしまう。許しがたい背信行為だ、と思った。

翌日の夕方、大門代表理事らが医科歯科大の僕の教授室にきた。延期の理由を詳細に説明し、何度も詫びを述べてから帰って行った。

皆が帰ってから僕は秘書も帰し、暫く一人で教授室に残っていた。一人になって今後のことを少し考えたかった。

ぼんやりとパイプを吸いながら、教授室の窓から夕暮れの御茶ノ水橋の雑踏を見ていた。

迷っていた。

新学科の計画は挫折した。どうしようか。

もうすこし様子を見るべきか、断るべきか。

しかしそれにしても、大学の理事会が決めて他の大学にまで正式に援助を依頼した計画を、そんな

に簡単に変えられるのか。常識的には考えられない事態で、大学の社会的信用は失墜するに違いない。

しかし恐らく国士館には出来ないだろう。こんな意気地のない理事会ではどうせ一年後もだめだろう。早いところきっぱり縁を切って、いま誘われている病院へ行くことを考えたほうが良いかも知れない、と思った。だが辞意を申し出る前に、もう一度松島理事長に会って話を聴き、僕の言いたいことを言ってからじゃないと、何となく腹の虫が治まらない、とも考えた。

僕は松島理事長にアポを取るように秘書にメモを残し、部屋を出た。

#### 「一年後に申請いたします」

平成9年頃の僕は多忙だった。麻酔科教授として毎日の臨床と研究の指導をし、その外に手術部長、救急部長、集中治療部長、それに幾つもの院内の委員長をやり、学会や文部省や厚生省の仕事も多かった。

一週間の内に、福岡、大阪、札幌と出張したこともあった。

そんな過密なスケジュールの間隙を縫って、松島理事長に会ったのは、一週間後の2月18日の夜、場所は世田谷の理事長室だった。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

小柄な理事長は小さな声で何度も同じ詫びの言葉を繰り返した。

飾り気のないトツツとした話しぶりに、新学科反対派と僕との間に挟まれて、動きの取れない理事長の苦悩が滲み出ている。

誠実そうな老人で、好々爺という印象だった。また何となく憎めない人だ、とも思った。

僕は理事会の無責任さを激しく非難した。

が、いくら非難しても畢竟、話はそれままで進展はない。

理事長の口も重い。いうべき言葉がなかったのだろう。

「この儘では納得できません」

最後に僕はやや強い口調でいった。一年後というなら、それを保障する証を示して欲しい。一年、また一年と延ばされるのはやり切れない。国士館がある程度はしっかりした見通しをつけてくれないと、我々としても対処に困る、と僕はいった。

「分かりました、一週間ほど待って下さい」

松島理事長のこの言葉を聞いてから、僕は理事長室を出た。夜の風が肌を刺すように冷たかった。2月26日夜、松島理事長、三浦学長などと湯島のガーデンパレスで会った。開設準備室の野田さんも同席した。

「これで何とか納得してください」

話が一段落すると、松島理事長はそうって一枚の紙を僕に渡した。

理事長印の付いた松島博の名で、「平成10年4月に救命健康学科の開設申請を行います」と書いてあった（当初、新学科の名称は救命健康学科だった）。

平成9年申請を1年延ばし、その間に学内の反対派を説得し、平成10年に新学科の開設申請をするというのである。

理事会に非があるとはいえ、一年延期を認めてしまった現段階で出来ることは、この理事長公印のあるお墨付きを頂くのが精一杯なのかも知れない。まあ、こんなところで手を打つか——。それまでの猛々しい僕の闘争心はこの一片の紙切れでかなり軟化していた。

## 一本の電話

平成9年3月3日、夕刻、大門代表理事から電話が入った。

電話の内容は概要次のとおりだった。

（理事長が確約書を出したが、学内の情勢は大変厳しい。一年後に申請できる見通しは全くない。これ以上ご迷惑をかけることはできないので、この際先生も新学科設立の計画から撤退されることをお勧めしたい）

僕は自分の耳を疑った。何ということだ。先週、

理事長から来年に申請書提出という確約書を貰ったばかりなのに——。

大門氏は僕への親切心から、学内事情を知る人間として敢えて理事長の意向を無視して忠告してくれたのだろう。

しかし、この撤退勧告は沈静化していた僕の闘争心に再び火をつけた。

僕を含めて何人かの人生を変えるかも知れない大事を、こうも軽々しく変転させる理事会のいい加減さ、無神経さに腹が立ったのである。

よーし、こうなりゃ徹底的に戦ってやるぞ、と思った。

翌日早朝、僕は出張で九州福岡のホテルにいる大沢英雄先生(当時、体育学部長)に電話した。

大門氏からの電話の件を話し、忌憚のない学部長の意見を聞かせて欲しい、といった。もし大沢先生も大門氏と同じ意見なら即刻、国士館から手を引く積りだった。

だが大沢先生の考えは大門氏とは違っていた。

（私も頑張るから、先生も撤退など考えず頑張ってください）

大沢先生とは10分ほど話したが、この会話は、僕の気持ちに少なからず安らぎを与えてくれた。

その日の夕刻、新学科就任予定者の全員に文部省近くの霞山会館に集ってもらい、今までの経緯を詳細に報告した。もちろん、大門氏の電話のことも話した。そして最後に、もしこのまま新学科の話がダメとなれば不本意だが理事長の確約書をもとに法的に争う積りです、と言った。本当にやる積りだった。

長期戦になる、そう思った。

## 新学科設立の願望

国士館学内の軋轢は相変わらず続いていたが、僕らはとにかく平成10年の申請を目指して着々と準備を進めた。野田氏は週に2、3度必ず僕の教授室に相談に訪れ、ついでに国士館の状況を知らせてくれた。彼の飄々とした姿は忘れられない。

国士館の方の進捗状況は思わしくなかった。僕ら外の人間には理事会、体育学部、他学部の反対派が混然と入り乱れて誹謗しあい、反対を唱え、抜き差しならない事態になっているように見えた。僕らと理事との会合も頻繁に行われたが、僕らが理事会の優柔不断をなじり、僕も時には声を荒げて理事長に迫ることもあった。会合の場所は虎ノ門の霞山会館が多かった。今でも僕はあの場所を通るたびに、当時の不快な思い出が甦り、憂鬱な気分になる。

それからの一年は、会合に会合を重ねて得る物は何もなかった時期で、記述に値しない。

この間、就任予定者で内科学担当の後輩、藤原秀臣君が国士館の煮え切らない態度に業を煮やして辞めていった。残念だがやむ得なかった。

僕も友人や先輩から、そんなところ早く辞めちまえ、と何度も言われたし、自分でも辞めよう、と思ったことが何回かある。しかし途中で簡単に放り出す訳にはいかなかった。すでに現職を辞めて国士館に来ることを決めている人がいたからである。

それにもう一つ大事な理由は、この学科の新設に携わっているうちに、これが日本の救急医療に革命的新風を送り込む原動力になるかも知れないと思うようになっていたことである。教職員を揃え、カリキュラムを組み、校舎の見取り図を眺めているうちに、新学科が既成の概念として僕の心の片隅に住みついたようになっていた。

(何としても新学科を作りたい)

いつしかそれは僕の願望に近くなっていた。

## ようやく申請

結局、大門氏が予想したごとく、平成10年の学科申請はできなかった。

憤懣やるかたない思いだったが、ここまできたら最後の決着を見届けないと気持ちの治まりがつかなかった。

大沢学部長の勧めもあって僕と竹中君は平成10年

4月から、体育学部教授として勤務し、学内から新学科設立を推進していくことになった。

憂鬱な毎日が続いた。慣れない環境、先の見えない新学科、臨床を離れた寂しさ、等々、明るい話はなかった。この時期、渡辺剛教授、福本正幸事務官がいろいろと僕の世話をしてくれ、ずいぶん力づけられた。

平成10年2月には体育学部教授会が理事会と学長の不信任を決議したりして紛糾は続いていたが、僕が赴任した頃から事態は僅かづつだが確実に変わってきていた。

敵役だった親愛なる松島理事長は病を得て退陣し、理事も変わり、平成10年4月から新しく西原春夫氏が理事長に就任した。また学内の反対派の勢いも何となく衰退して行ったようだった。

潮の引く時期だったのかも知れない。

と同時に体育学部の新学科を認めようという気運も、少しづつだが芽生えてきたようだった。話し合いが良い方向に向かっているという情報は、時折、福本事務官や渡辺教授が教えてくれた。

その後もいろいろと紆余屈曲はあったが、当初の予定より二年遅れの平成11年4月、ついに新学科の開設申請が行われた。

学内の軋轢を避けるため、学科名も「スポーツ医科学科」という当初考えていたのとは全く違う名前になった。しかし正直の所、もう名前なんかは二の次だった。大事なことは出発させることだった。

開設までの二年間、国士館大理事会とのやり取りを除いて、最も苦勞したのは人事だった。とくに臨床系の教官採用は難航した。臨床を辞め教職に就く、熱意のある人材はなかなかいなかった。先輩、同僚、後輩と、あらゆる人脈を使って人探しをしたが適当な人材は見つからなかった。これはと思う人物もたまにいたが面接してみて、大抵はがっかりすることが多かった。

人材難から、一時は学科新設を諦めかけたこともあった。

そこに救世主が現れた。



杏林大理事長の松田博青先生である。彼は数十年来の畏友だが、僕の苦境を知ってすぐに学内から、内科二名と救急医学二名の、講師クラスの優秀な人材四人を送り込んでくれた。救われたと心底から思った。

今でも僕はこの学科新設の最大の功労者の一人は松田博青先生だと思っている。

## 新学科スタート

学生が集まるかどうかという我々の心配は杞憂に終わった。新学科の入試競争率われわれの予想を遙かに超えて高いものだった。

平成12年4月、真新しい4階建ての建物に、第1回の新生を迎えた。入学式やオリエンテーションなど幾つかの行事があったが、それらの行事の場で僕は、長い苦勞の末やっとここまで漕ぎ着けたという感慨はあったものの、喜びはあまりなかった。

(よかったですね、嬉しいでしょう)

と多くの人から言われた。しかし嬉しさはなかった。

代わりに僕の体には適度の緊張感が満ちていた。日本の救急医療を飛躍的に発展させる有為の人材をこの国士館で育成する。その第一歩が始まったんだという思いが強かった。そしてその責任者としての使命感を思っけて緊張していた。

## いろいろな出来事があった

厳しい競争率を通過してきた学生約160名と、教職員16名で新学科スポーツ医科学科が始まった。教師も学生も戸惑うことの多い試行錯誤の連続だった。その間、紙面には到底書き尽くせないほど、いろいろな出来事があった。

振り返ってみると、苦しかったことより楽しいこと、感激したことの方がずーと多かったように思う。学生たちは乾いた砂に水を注ぐように知識を吸収し、教職員は熱心に教育した。教員と学生

との交流も実に円滑だった。それは29年間の僕の医学部教授時代には経験したことのない新鮮な体験だった。

医学部の学生とはスポ医の学生のように親しみを込めて挨拶を交わしたり、話をしたことは殆どない。向こうから挨拶されたことも少なかった。

僕だけかもしれないが、今考えると不幸なことだったと思う。

卒業間近い学生と話し合っ、人間は教育によってはこんなにも立派に成長するものなのか、と驚いたことがある。高校出たての初々しい新入生が、4年経つと知性と自信に溢れた素晴らしい青年になる。教育の力の凄さを改めて思い知らされた嬉しい経験も少なくない。

悲しい出来事もあった。中でも柁沢靖弘君の死は最も痛ましかった。

柁沢君は医科歯科大の後輩で小児科医だったが、国立病院の医長の席を捨てて新学科に参加してくれた人である。明朗で教育熱心な男だった。

平成15年1月末、彼から病気のことを聞き大変驚いた。入院したときは既に手術適応はなかったが、それでも彼は必死に病と戦った。しかし一年後の平成16年2月8日に夭折した。惜しい人材を失った。

最後に見舞ったとき、「先生もう一度教壇に立ちたいです」、と泣き崩れた彼の姿を僕は終生忘れないだろう。せめてあと2ヶ月命を長らえて、我々が育て上げた国士館大スポーツ医科学科第一回卒業生の晴れ姿を彼に見せてやりたかった。

## 今思うこと

平成9年から11年にかけて起こったあの騒動は一体なんだったのだろうか。僕を含めて大勢の人々が膨大な時間とエネルギーを費やし、怒りと誹謗を繰り返したあの時期は一体何だったのか。

すべては時の流れにかき消され、詳しいことはもう分からない。

あれは恐らくスポーツ医科学科という本邦初の新学科の生まれ出る苦しみだったのかも知れない。逆にいえば、ああいう苦しみ過程が新学科誕生には必要だったのかもしれない。そう考えると、あの騒動の頃が何とも懐かしい感じと共に思い出されるのは筆者一人だろうか。

スポーツ医科学科はその後順調に発展し、国士館は今や救急救命士の養成校としては質、量とも本邦のナンバーワンになった。ご同慶の至りである。しかし問題はこれからである。

ナンバーワンであり続けることは、ナンバーワンになることより遥かにむずかしい。本邦最高の救急救命士養成大学の地位を如何に堅持していくか、これからが勝負どころだろう。

現在、東京消防庁など各地の救急への就職には毎年、本校卒業生が数十名が合格している。東京消防庁に同一大学からこれほど多くの合格者が入るのは同庁の歴史始まって以来と聞いている。この勢いで行くと、近い将来、日本の救急救命士の領域を国士館大卒業生が席卷するのではなかろうかと、秘かな期待を持って成り行きを見守っている。それと同時にあの騒動の原因となったこの学科が、計画倒れで生まれてこなかったかも知れないこの学科が、ここまで立派に成長したかと思うと、まことに感慨無量のものがある。

(この文は一個人の主観的な回顧録である。不適切な表現や、年月日、場所などに不正確な点があるかもしれない。お許しを頂きたい)



